

< A 表現 >

(2) 器楽の活動を通して

* 中学校学習指導要領「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 2 内容の取扱いと指導上の配慮事項」より

- (2) 器楽の指導については、指導上の必要に応じて和楽器、弦楽器、管楽器、打楽器、鍵盤楽器、電子楽器及び世界の諸民族の楽器を適宜用いること。なお、和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。
- (3) 我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。
- (4) 読譜の指導については、小学校における学習を踏まえ、#やbの調号としての意味を理解させるとともに、3学年間を通じて、1#、1b程度をもった調号の楽譜の視唱や視奏に慣れさせるようにすること。

<ul style="list-style-type: none"> ○ 和楽器ならではの奏法（指打ち）を知るとともに、日本の音楽表現のよさや面白さに気付く。 <ul style="list-style-type: none"> ・同じ音が続く時、指打ちを使うことを理解する。 ・指打ちをする箇所を確認する。 ・指打ちした場合と、タンギングした場合とでの、音の表情の違いについて話し合う。 ○ 指打ちの奏法を取り入れながら「ほたるこい」を演奏する。 <ul style="list-style-type: none"> ・指打ちのタイミングや速さをいろいろ試しながら演奏する。 ・グループで演奏形態（独奏，重奏，リレー奏，輪奏等）を考えながら、発表し合う。 ○ 「ほたるこい」以外の簡単な旋律の演奏に取り組む。 （例）「たこたこあがれ」「なべなべそこぬけ」「ゆうやけこやけ」「かごめかごめ」 ○ 地域の祭りの囃子など、郷土の音楽について調べる。 	音色
--	----

【評価規準例】

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛の特徴（指打ちや息の入れ方など）に関心を持ち、基礎的な奏法（口の形や楽器の構え方の角度など）で演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、篠笛の特徴を捉えた音楽表現（指打ちのタイミングとスピードや息の入れ方など）を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図を持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛の特徴を捉えた音楽表現（指打ちのタイミングとスピードや息の入れ方など）をするために必要な、基礎的な奏法（口の形や楽器の構え方の角度など）などの技能を身に付けている。

「我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導」について

言葉と音楽との関係においては、日本語に注目する必要がある。「あ」や「お」、あるいは「か」や「さ」などの音は、すでに固有の響きをもっており、それらが組み合わせられて単語となり、言葉となって日本語特有の響きが生まれてくる。言葉のまとまり、リズム、抑揚、高低アクセント、発音及び音質といったものが直接的に作用し、旋律の動きやリズム、間、声の音色など、日本的な特徴をもった音楽を生み出す源となっている。このことは、歌唱に限らない。唱歌に見られるように、楽器の演奏においても言葉の存在が音楽と深くかかわっている。

中学校学習指導要領解説 音楽編 p. 62

「姿勢や身体の使い方」について

姿勢や身体の使い方においては、腰の位置をはじめとした姿勢や呼吸法などに十分な配慮が必要となる。例えば民謡は、その歌の背景となった生活や労働により強く性格付けられており、声の出し方や身体の動きなどに直接間接に表れている。長唄や地歌、箏や三味線などは、基本的に座って演奏することによって伝統的な音楽の世界が現れてくる。また、篠笛や尺八の演奏をはじめ、声や楽器を合わせる際の息づかいや身体の構えが、旋律の特徴や間を生み出している。声を出す場合も、楽器を演奏する場合も、それに適した身体の使い方が大切にされてきた。

このように、我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導において、言葉と音楽との関係に注目し、姿勢や身体の使い方に配慮することは、我が国の伝統や文化を理解するための大切な基盤にもなっていく。

中学校学習指導要領解説 音楽編 p. 63

<p>○ 箏のいろいろな奏法（合せ爪、スクイ爪、流し爪、ピッツィカート、トレモロ）を身に付け、二重奏に挑戦する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的な親指による奏法とスクイ爪やピッツィカートによる奏法の音色や雰囲気の違いを感じ取りながらそれぞれのパートの特徴をつかむ。 ・流し爪やトレモロを入れたときと入れないときの雰囲気の違いを感受し、効果的に演奏できるよう、タイミングや長さなど音楽表現を工夫する。 ・パート1とパート2に分かれて二重奏を行い、それぞれが同じリズムで合うところとずれて互いに掛け合うところの確認をしながら、合わせて演奏する。 ・互いの演奏を聴き合いながら、タイミングや音のバランス、速度などを工夫し、主旋律だけで演奏した時とは違う演奏表現を楽しむ。 <p>○ 箏の発表会を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人数や箏の面数により、発表の仕方を工夫する。 ・どんなことを一番大事にして演奏するのか伝えてから発表したり、ワークシートに表したりする。 	<p>音色</p> <p>テクスチャ</p> <p>速度</p>
--	----------------------------------

【評価規準例】

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
<ul style="list-style-type: none"> ・箏固有の音色や奏法に関心を持ち、基礎的な奏法で演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 ・声部の役割や互いの響きに関心を持ち、音楽表現を工夫しながら合わせて演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・箏の音色、平調子による旋律、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、楽器の特徴を捉えたり声部の役割を感じ取ったりして音楽表現を工夫し、どのように合わせて演奏するかについて思いや意図を持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器の特徴を捉え、声部の役割を生かした音楽表現をするために必要な、基礎的な奏法を身に付けて演奏している。

「和楽器の指導について」

箏、三味線、尺八、篠笛、太鼓、雅楽で用いられる楽器などの和楽器については、その指導を更に充実するため、中学校第1学年から第3学年までの間に1種類以上の和楽器を扱い、表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫することを示している。生徒が実際に演奏する活動を通して、音色や響き、奏法の特徴、表現力の豊かさや繊細さなどを感じ取ることは、我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことにつながっていくと考えられる。

中学校学習指導要領解説 音楽編 p. 61

箏を弾いている時に隣で弦の名前を歌ってあげるなど、箏一面を二人で交替しながら使用するペア学習が効果的です。二重奏を行う場合は4人1組で行うとよいでしょう。

また、爪はなるべく指の太さに合うものを選びましょう。「さくらさくら」の主旋律を演奏する場合など、親指に爪をつけるだけで弾ける場合もありますが、人さし指や中指に付けるといろいろな奏法で弾くことが可能となり、表現の幅が広がります。

中学生の男子になると、かなり指の太い生徒もいますので、様々なサイズを1クラス分+αの余裕を持って揃えておくとい良いでしょう。

第2学年 A 表現 (2) 器楽

題材名「リコーダーの響きを楽しもう」

教材名「ソナタ K. 331 (モーツァルト)」

【第2学年及び第3学年の目標】

- (1) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる。
- (2) 多様な音楽表現の豊かさや美しさを感じ取り、表現の技能を伸ばし、創意工夫して表現する能力を高める。
- (3) 多様な音楽に対する理解を深め、幅広く主体的に鑑賞する能力を高める。

【第2学年及び第3学年の器楽の指導事項】

- ア 曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して演奏すること。
- イ 楽器の特徴を理解し、基礎的な奏法を生かして演奏すること。
- ウ 声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、表現を工夫しながら合わせて演奏すること。

【身に付けさせたい力】

本題材で中心となる指導事項 → ア, イ

- ・旋律の動きの特徴や、同じリズムで重なり合う音色の響きのよさを感じ取りながら、思いや意図を持って演奏する。
- ・リコーダーにふさわしい音色や奏法（レガート奏法など）を工夫して演奏する。

【学習活動例】

学 習 活 動 例	[共通事項]との関連
<p>○ 範奏を聴いて曲想をつかんだり、演奏に対する思いを持ったりする。</p> <ul style="list-style-type: none">・曲に合わせて手を動かすなど体の動きを用いながら、八分の六拍子にのったゆったりした旋律を感じ取る。・旋律や音色から感じ取った曲のイメージについて、友達と意見交換する。・リコーダーの音色そのものや二つの旋律の響きの重なり合いのよさを味わう。 <p>○ 奏法に気を付けながら演奏する。(楽譜→p. 96 参照)</p> <ul style="list-style-type: none">・「La La La～」やドレミで歌い、旋律の動きやブレスの場所を理解する。・イメージする音色や正しいリズムを表現するため、タンギングや息の強さ、音の伸ばし方などに注意しながら演奏する。・アーティキュレーションをいろいろ試し、曲想にふさわしいものを選ぶ。・主旋律と副次的な旋律の音量のバランスや強弱を意識して演奏する。 <p>○ 楽曲の特徴をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none">・曲を聴いたり楽譜を見たりしながら、拍子、速度、旋律の動きなどの曲の特徴を理解する。・二つの旋律が似たリズムで重なっていることに気付くとともに、繰り返されている部分のあることに気付く。	<p>旋律 音色</p> <p>リズム テクスチャ 構成</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・教師の動きを見てまねたり楽譜を見たりしながら旋律のリズム打ちをして、音の動きを覚えるとともに、手の打ち方を工夫してフレーズを感じ取らせる。 ○ 曲想の工夫をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・フレーズ感を出せるよう、ブレスやアーティキュレーションを工夫する。 ・教師がフレーズを変えて演奏し、聴き比べて印象の違いを感じ取らせることで、旋律のまとまりを意識させたり、自分たちはどう表現するか考えさせたりする。 ・二重奏などの場合には、ペアやグループで、どんな表現をしたいか共通のイメージを持つとともに、そのためにどういう工夫をするか話し合う。 ・グループやペアの演奏をする中で速度をいろいろ試し、自分たちのイメージする表現に近づける。 ○ お互いに聴き合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・曲想表現に気を付けながら、ペアやグループごとに演奏する。 ・どのような点に注意して演奏するかを聴き手に知らせ、聴き手は注意した点が技能的に表現されているかを聴き取る。 	<p>速度 強弱</p>
---	------------------

【評価規準例】

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
<ul style="list-style-type: none"> ・ゆったりと優雅な曲想を表現するために、リコーダーの音色に関心を持ったり奏法を工夫して演奏したりする学習に主体的に取り組もうとしている。 ・リコーダーの特徴や、レガートなど基礎的な奏法に関心を持ち、それらを生かして演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リコーダーの音色、旋律の動き、リズム、構成などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じしながら、レガート奏法など曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図を持っている。 ・リコーダーの音色、旋律の動き、リズム、構成などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じしながら、リコーダーの基礎的な奏法を生かした音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図を持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲想を生かした、フレーズを意識した演奏のために、息の強さやブレスの場所に気を付け、レガート奏法など必要な技能を身に付けて演奏している。 ・リコーダーの特徴、基礎的な奏法を生かした音楽表現をするために、奏法、呼吸法など必要な技能を身に付けて演奏している。

表現の活動において、子どもたちにどのように演奏したいかなどの思いや意図を持たせることが大切とされています。「どのように工夫して表現しようか」といった話し合い活動は授業の中でよく行われていることですが、全体あるいはペアやグループとしてのイメージの共有化については不十分なまま活動が進められている場合があります。

個々の思いや意図は当然持たせますが、一つの楽曲を一緒に表現するのですから、個々の考えを基に「少人数あるいは全体としてどう表現するか」をきちんと押さえる必要があります。

また言葉で伝え合うだけでなく、実際に音（声）を出し試行錯誤しつつ表現方法を探っていくことで、イメージを表現するための技能的な面も追究することができます。

教師は、表現したい思いはあっても具体的にどうすればいいのかが分からないでいる子どもたちに、いかにヒントを与えられるか・具体的な提示ができるかを心掛け、子どもたちが知覚・感受したものについて思考・判断し、表現することにつなげることができるようにしましょう。

第3学年 A 表現 (2) 器楽

題材名「楽器の特徴を生かしたリズム伴奏を工夫しよう」

教材名「テキーラ」(C. リオ 作曲／高山直也 編曲)

【第2学年及び第3学年の目標】

- (1) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる。
- (2) 多様な音楽表現の豊かさや美しさを感じ取り、表現の技能を伸ばし、創意工夫して表現する能力を高める。
- (3) 多様な音楽に対する理解を深め、幅広く主体的に鑑賞する能力を高める。

【第2学年及び第3学年の器楽の指導事項】

- ア 曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して演奏すること。
- イ 楽器の特徴を理解し、基礎的な奏法を生かして演奏すること。
- ウ 声部の役割や全体の響きとのかかわりを理解して、表現を工夫しながら合わせて演奏すること。

【身に付けさせたい力】

本題材で中心となる指導事項 → ア, イ, ウ

- ・ラテン音楽に親しみ、打楽器のリズムが生み出す特徴に関心を持ち、意欲的に器楽合奏に取り組む。
- ・楽器の特徴や曲の構成、曲想を捉え、この曲にあったリズム伴奏を工夫する。
- ・リズムや打楽器の音色の組み合わせや重なりを生かしてグループアンサンブルをする。

【学習活動例】

学 習 活 動 例	〔共通事項〕との関連
<p>○ 「テキーラ」の演奏を聴いたり映像を見たりしながら、曲の特徴をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きく三つの部分で構成されていることを理解する。 ・同じ旋律やリズムが繰り返されていることを理解する。 ・様々な打楽器が演奏を盛り上げていることを感じ取る。 	<p>旋律 リズム</p>
<p>○ ラテンパーカッション等でリズムパターンを演奏し、楽器の特徴を生かしたリズムパターンを選択する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いくつかのリズムパターンを提示し、それぞれのリズムを手で打ってリズムパターンに慣れる。 ・A (前奏及び後奏), B (第1旋律), C (第2旋律) の各旋律に合わせて、各リズムパターンを手で打ち、それぞれの雰囲気の違いを感じ取る。 ・範奏を参考に、リズムパターンに合う音色の楽器を探す。 ・自分の選んだ楽器とリズムパターンで「テキーラ」のリズム伴奏をする。 	<p>音色 リズム</p>
<p>○ グループに分かれ、リズム伴奏を工夫していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バランスを考えながら担当楽器とパートを決める。 ・A B C に合うリズムパターンと楽器の組み合わせを決める。 ・お互いのグループの演奏を聴いたり、自分たちの演奏を録音したりしながら、表現を工夫する。 	<p>リズム 音色 テクスチャ 構成</p>

<p>〈発展的な学習〉</p> <p>○ A B Cの旋律を楽器で演奏する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Sop. リコーダー、Alto リコーダーや鍵盤ハーモニカ、キーボード等の旋律楽器でリズムの持つ特徴を生かした演奏やアーティキュレーションを生かした奏法を工夫する。 ・ 希望者にはキーボード+低音楽器（ピアノパート）を担当させる。 <p>○ グループごとにリズム伴奏を発表し合ったり、旋律パートなども演奏しながら学級全体で合奏したりして、ラテン音楽の楽しさを味わう。</p>	<p>旋律 リズム</p>
--	-------------------

【評価規準例】

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
<ul style="list-style-type: none"> ・ラテン音楽の曲想に関心を持ち、曲にふさわしい音楽表現を工夫して演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 ・打楽器固有の音色や響き、その初歩的な演奏方法に関心を持ち、それらを生かして演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 ・各打楽器の役割と全体の響きとの関わりに関心を持ち、音楽表現を工夫しながら合わせて演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム、音色、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、曲想を味わって曲にふさわしい音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図を持っている。 ・リズム、音色、テクスチュア、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、打楽器固有の音色や響きを理解し、その初歩的な演奏方法を生かした音楽表現を工夫したり、各打楽器の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫したりするなど、どのように合わせて演奏するかについて思いや意図を持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ラテン音楽の曲想を生かした、曲にふさわしい音楽表現をするために必要な打楽器の奏法を身に付けて演奏している。 ・打楽器固有の音色や響き、初歩的な演奏方法を生かした音楽表現するために必要な奏法を身に付けて演奏している。 ・各打楽器の役割と全体の響きとの関わりを生かした音楽表現をするために必要な奏法を身に付けて演奏している。

「指導と評価の一体化」について

本事例での評価規準例は、打楽器のリズム伴奏を演奏する活動を対象に設定しています。最終的には、旋律楽器を交えて合奏できればより楽しい活動になると思いますが、本題材で身に付けさせたい力は「楽曲の特徴や曲の構成、曲想を捉え、この曲にあったリズム伴奏を工夫すること」ですので、評価するポイントを絞っています。生徒が主体的に取り組んだ旋律楽器の演奏に関することは評価の対象にしていません。（時数の関係であまり題材が大きく膨らまないよう配慮しました。）

しかし、この教材は、前奏や後奏の旋律は2音だけで構成されていたり、**A~C**のどの部分も繰り返しが多く使われていたりするなど、楽器の演奏を苦手としている生徒にもリズムの特徴を生かした演奏を体感させることができるようになっていきます。ソプラノリコーダーや鍵盤ハーモニカはほとんどの小学校で扱っており、上手に活用すれば（練習にあまり時間を費やさなくても）合奏する楽しさを味わうことが容易となります。生徒の実態を知り、楽器やパートの選択を工夫することによって、どの生徒も合奏に参加でき、合わせて演奏する喜びを中学校でも味わわせたいものです。

